

四 浄入願心

『浄土論註』下巻 2025-09 岡本大志

【はじめに】

～天親『浄土論』ここまでの流れ～

『浄土論』長行において、「一 願偈大意」に当たる箇所ではまず、願生偈の目的が「示現 觀彼 安樂世界 見阿彌陀仏 願生彼国」と示される。

「二 起觀生信」に当たる部分では、「一」で示された目的のために必要な「修五念門行成就」について示される。

「三 觀行体相」に当たる部分では、「二」の中心課題である、三嚴二十九種莊嚴の觀察について偈文にそって示される。

そして、この「四 浄入願心」に当たる部分から先は、あらためて願生偈の深い義について「応知（知るべし）」を多用しながら明かされ、曇鸞はそれを受けて「応知者（知るべしとは）」とたずねていかれる（計六回）。

①浄入願心—浄土形成の因果

已下は是れ解義の中の第四重なり。名づけて浄入願心となす。浄入願心とは。

「又た向きに、莊嚴仏土功德成就と、莊嚴仏功德成就と、莊嚴菩薩功德成就とを觀察することを説きつ。此の三種の成就是、願心をして莊嚴せり。知るべし」

「知るべし」（応知）とは、此の三種の莊嚴成就是、もと四十八願等の清浄願心の莊嚴したもう所なるに由りて、因浄なるが故に果浄なり。無因と他因の有にはあらずと知るべし。

『浄土論』において、「願心莊嚴」という重要な言葉が示される箇所である。曇鸞は、願心の性質を「清浄」と示し、これまで「三 觀行体相」で確かめてきた莊嚴成就の清浄性（総相として示された莊嚴清浄功德成就をはじめとして）と対応させている。

「浄入願心」という名称の意味は、清浄という性質は願心におさまる（摂入する）ということであろうか。

そして次に、

「《訳》『知るべし』というのは、この三種莊嚴が完成したわけは、法蔵菩薩が因位するとき、汚れなき清浄の四十八願をたて、その本願にかなうた修行をなして完成されたものであるから、いわば法蔵菩薩の清浄願心によってしつらえられたものである。浄土建立の因が清浄であるから、完成された果の浄土のしつらいも清浄である。菩薩の願心が因となっているから無因ではなく、また願心に基づいているから他因によって完成されたのではない、と知るべきである。」（『仏典講座23』参照、以下訳も同様）

とある。これは『大経』上巻の如来浄土の因果（法蔵菩薩の発願と修行によって建立された浄土の説示）を念頭に語られていると思われる。

とくに、「知るべし」とは、莊嚴はただその形を表すためではなく、その因の心を表すためであり、「形の元にある心を知るべし」ということであろうか。

夜晃師はこの箇所について次のように述べておられる。

「浄土の廣大なる莊嚴は、ただ単に美しき世界ではなくて、特に願心莊嚴の世界であることを示されたのである。願心莊嚴の世界とは、浄土の三嚴は本法藏菩薩の四十八願等の清淨願心の莊嚴せられたる世界であるとの意である。即ち弥陀の浄土は「報土」たることを示されたのである。願心莊嚴の世界とは、報土である。憶うに、凡夫は生死海をその生活対象とし、二乗は灰身滅智かいしんめつちの實際を証して何らの活動をもたず、自力の行者は化土に入り、而して菩薩の生活は報土をその生活対象とする。報土に化生することは、菩薩の無限の光榮である。報土は清淨願心の莊嚴せる世界である。而して、願心即ち四十八願は、一一誓願為衆生故（『般舟讚』）とてその全てが衆生において必然の交渉を持つ、若不生者不取正覺の願の具体化された世界である。衆生を救わずばおかぬとの大悲方便、利他成就より外に何等の意味なき世界が報土である。願は衆生の苦惱なくしては生まれないのである。然るに願心莊嚴の世界、即ち報土は、「因淨なるが故に果淨なり。」清淨なる因果、即ち本願のままに成就せられたる如来正覺の依報であるところの世界である。「因無くして他の因の有るには非ずと知るべし。」願心莊嚴の世界にして、無因でもなく他因でもない。唯一願心に酬いて顕現せる世界である。」（『全集』15・228頁）

② 広略相入—浄土成立の構造

「略説して一法句に入るが故に」

上の国土莊嚴十七句と、如来莊嚴八句と、菩薩莊嚴四句とを広となし、入一法句を略となす。何が故ぞ広略相入を示現する。諸の仏菩薩に二種の法身あり。一には法性法身、二には方便法身なり。法性法身に由りて、方便法身を生じ、方便法身に由りて、法性法身を出す。此の二法身は、異にして分かつべからず。一にして同ずべからず。是の故に広略相入して、統べるに法の名を以てす。菩薩若し広略相入を知らずんば、則ち自利利他することあたわず。

①において、願心の因によって浄土の果があることが示されるが、その因果はなぜ成立するのか。その理由を表すのが「略説して一法句に入るが故に」（訳：略して説くと、一法句に収まるからである）であると読める。（「一法句」とは、真如法性そのものの意）

それでは、なぜ「入一法句」がその理由になるのだろうか。それについて星野元豊氏は「法藏がさとした真如法性の絶対空が差別の相の二十九句に対して一法句とよばれているのである。このようにして絶対空即差別の種々相、二十九種の莊嚴であることをさとり、そのさとりを土台において、そこから浄土建立の願心をおこし、浄土建立の原理を實踐にうつし、行を修して二十九種の莊嚴を完成したのである。従って願心から莊嚴された浄土の莊嚴はもとへもどせば一法句の真如におさまるのである。それだから二十九種の莊嚴は単なる空想的な願望によって描き出された莊嚴ではない。法藏の願心は単なる空想的な願望の心ではない。法藏の願心は絶対空のままが差別であり、差別のままが絶対空であるという差別即平等、平等即差別の理をさとした心である。法藏の願心はこの原理の上に立っているのである。莊嚴二十九種の多は即一法句の一である。一即多、多即一の原理に基いて浄土の莊嚴は建立されているのである。このようにして浄入願心と

いうことの根拠は二十九種の莊嚴が一法句におさまるということ、すなわち多即一、一即多という一法句そのものの原理にあるのである。」と解説されている。（『講解教行信証』）

問 以上のように、願心莊嚴の因果の成立根拠は、「入一法句」であり、そこに「一即多の原理」があるから。ということでもいいのだろうか？

続いて広と略は二不二（二にして不二）であることが示される。広と略は下図のように分けられるだろうか。

広略相入・二不二	広	方便法身	為物身	差別	有	多	二十九種莊嚴
	略	法性法身	実相身	平等	空	一	一法句

法性法身と方便法身の関係性について「**法性法身に由りて、方便法身を生じ、方便法身に由りて、法性法身を出す**」の語句が注意される。

法性法身→方便法身と、形なき世界が形をとるときには「生じる」と表現され、

方便法身→法性法身と、形を通して形なき世界を示すときには「出だす」と表現される。

「出だす」とは、そこ（方便法身）から生まれたのではなく、そこ（方便法身）を通して流れ出てきたというニュアンスだろうか。

また、星野氏は「では広略相入を実現せしめる動力のはたらきをなすものは何であろうか」と問いを立てられ、「広と略との相入のエネルギーとなるものが、法性法身と方便法身との不一不異の関係である。生き生きとした二法身の関係こそは広略相入を具体的に生かしめている活動源である。「統ぬるに法の名をもってす」とは、この二法身の関係構造もその根性は真如の一法である。森羅万象、一切のものすべて真如ならざるはない。有はそのまま宛然^{えんぜん}として空であり、空宛然として有ならざるはない、有即無、無即有をなりたたしめる絶対空こそは一切を統合する法そのものである。有即無、無即有の絶対矛盾の自己同一が一如の法そのものである。そのところをいま「統ぬるに法の名をもってす」といっているのである」と示される。（『講解教行信証』）

上記の内容について、親鸞聖人の次の文との関わりで考えてみる。

A 真実功德ともうすは、名号なり。一実真如の妙理、円満せるがゆえに、大宝海にたとえたまうなり。一実真如ともうすは、無上大涅槃なり。涅槃すなわち法性なり。法性すなわち如来なり。宝海ともうすは、よろずの衆生をきらわず、さわりなく、へだてず、みちびきたまうを、大海のみずのへだてなきにたとえたまえるなり。

B この一如宝海よりかたちをあらわして、法蔵菩薩となのりたまいて、無碍のちかいをおこしたまうをたねとして、阿弥陀仏となりたまうがゆえに、報身如来ともうすなり。これを尽十方無碍光仏となづけたてまつれるなり。この如来を南無不可思議光仏ともうすなり。この如来を方便法身ともうすなり。方便ともうすは、かたちをあらわし、御なをしめして衆生にしらしめたまうをもうすなり。すなわち阿弥陀仏なり。（『一念多念文意』）

この親鸞聖人の文は、**A**で「名号」という方便法身がそのまま「一実真如の妙理」と示され【有即無】**B**でその一如の法性法身から方便法身として阿弥陀仏が回向してくる【無即有】ことを語

る内容として読めるのではないだろうか。

曇鸞は続いて、「菩薩若し広略相入を知らずんば、則ち自利利他することあたわず。」（訳：浄土往生のための五念門の行を修める求道者にして、もしもこの広と略と互いに収まるという道理を知らないならば、自利・利他の菩薩行を全うすることはできない）と述べる。

この箇所について以下のように示される。

「かくして法蔵に覚されたものが広略相入の事実である。この広略相入の事実に基いて法蔵はその願心から浄土を莊嚴したのである。この広略相入の事実なくして莊嚴された浄土は空想の浄土でしかない。そのような浄土へ往生しても一如への帰入は不可能である。浄土の莊嚴功德の眞実性を確証するものは広略相入の事実なのである。従ってこの広略相入の事実の認識なくしては、菩薩は自利利他することができないといわれる所以である。そしてこの広略相入の地盤となるものは一如そのものである。一如が地盤であればこそ広略相入ということが成立するのである。それ故に「広略相入して続ぬるに法の名を以てす」といわれているのである。そして一如を地盤として広略相入を実現せしめるものこそ、二種法身の不一不異の関係構造である。一如は一如のままはたらく、そのはたらきのすがたが法身である。一如はそのままのすがたにおいて法性法身であり、そのまま動いたところが方便法身である。水波の譬の如く、波はそのまま水、水はそのまま波である。生きた一如はもともとこのような構造である。以上のべたような構造において眞実の救済が具体的に実現されるのである」（星野元豊『講解教行信証』）

「法性法身とは、法性とは眞如の理、法身とは智、法性を証するの法身を法性法身という。（中略）。方便法身とは、自利を全うする利他を方便といい、形を現し名を示して能く衆生を攝取するをいうのである。この二身は、二にして一、一にして二である。般若の絶対智によって得るものが法身であり、この法身によって大悲方便をおこすのが方便法身である。大悲方便を全うすることなき法身はありえないし、法身なくしては方便身も出てはこない。方便法身の世界は、三嚴莊嚴の広相であり、法性法身は、形色を超えたる無相である。而して略相たる法性法身の徳は、広相たる方便法身の上に具現され、広相は顕現すればするだけ、略相に融入しゅうりゅうするのである。これを広略相入というのである。されば「菩薩もし広略相入を知らずんば、則ち自利利他する能わず」の言も知らるるのである。

「柔軟心とは、謂く広略の止観相順し修行して不二心を成ずるなり。」かく浄土の広略相入の徳を止観不二心によって得るもの即ち、菩薩の柔軟心である。されば柔軟心こそは、浄土の広略相入の徳によってのみ得る所の心である。柔軟心は、智慧である。広略の諸法を照見する般若の智慧である。これなくして自利利他することは不可能である。」（住岡夜晃『全集』15・231頁）

③一法句の本質

「一法句とは、謂わく清浄句なり。清浄句とは、謂わく眞実智慧・無為法身なるが故に」
此の三句は展転して相入す。何なる義に依りてかこれを名づけて法となす。清浄なるを以ての故

なり。何なる義に依りてか名づけて清浄となす。眞実智慧・無為法身なるを以ての故なり。

眞実智慧とは、実相の智慧なり。実相は無相の故に、眞智は無知なり。無為法身とは、法性身なり。法性は寂滅の故に、法身無相なり。無相の故に、能く相ならざることなし。是の故に相好莊嚴、即ち法身なり。無知の故に能く知らざることなし。是の故に一切種智、即ち眞実智慧なり。眞実を以て智慧に^{なす}目くるは、智慧は作に^{なす}あらず非作に^{なす}あざること明かすなり。無為を以て法身を標するは、法身は色に^{なす}あらず非色に^{なす}あざること明かすなり。

非を非する者、豈に非を非するの能く是たらんや。蓋し非を^{なす}無する、これを是と曰うなり。自から是にして待することなきも、復た是に^{なす}あざることなし。是に^{なす}あらず。非に^{なす}あらず。百非の喩えざる所なり。是の故に清浄句と言う。清浄句とは、謂わく眞実智慧・無為法身なり。

次に「一法句」とはそもそも何なのかを、「清浄句」「眞実智慧・無為法身」との関係で示し、曇鸞は順次に「一法句」が「清浄句」に収まり、「清浄句」が「眞実智慧・無為法身」に収まり、「いかなる意味で一法句というかといえば、清浄の義をもっているからである。いかなる意味で清浄というかといえば、眞実智慧・無為法身だからである」と述べる。

《以下、訳》

さて、眞実智慧とは、実相（一如、ありのままの相のこと）をさとした智慧である。すべて現象して存在するものの実相は、一定のかたちのないもの、無相のものであるから、実相をさとした智慧というのは、われわれの分別知を超えたもの、すなわち無知（無分別知）のことである。

また無為法身とは法性身のことである。法性とは寂滅のことであるから、法身とは一定のかたちなきもの、すなわち無相のものである。無相のものであるからこそ、法身はあらゆるかたちをとることができる。それ故に、かたちをとってあらわれた如来の相好（三十二相の身体的特徴）・浄土の莊嚴（三嚴二十九種）は、そのままが法身なのである。

また無知（無分別知）のものであるからこそ、智慧はすべてのものを知ることができる。それ故に、仏智をさしてすべてのものを知る智慧というが、これは眞実智慧のことなのである。眞実と智慧を同義語とみて、眞実智慧（眞実という智慧）というのは、智慧は作用するものでもなく、また作用しないものでもないことを説くためである。同じく無為法身の場合も、無為という話をもって法身の意味を顕わすのは、法身はいろ・かたちのあるものでもなく、いろ・かたちのないものでもないことを明かすためである。

非を否定したとき、どうして非を否定したものが是とされようか。思うに、否のないのが是である。そして、みずから是であってその是に対する非がなければ、また是といわれない。かくて、是でもなく非でもないなどという四句の分別を離れ、あらゆる概念の否定（百非）によっても譬えられない。それ故に、清浄句という。清浄句とは眞実智慧・無為法身である。

夜晃師はこの箇所について次のように述べておられる。

「如来浄土の略相とは実に、眞実智慧・無為法身である。眞実智慧こそは、無為法身、即ち眞相を照らす光である。その眞実智慧こそは、やがて尽十方無碍光の体であり、無為法身こそは、無量寿の体である。この光寿二無量こそ、一切莊嚴の根本をなすもの、如来の大功德である。この智慧こそ平等一如の実相を知る眞実智慧である。二十九種の広相と雖も、悉くこの眞実智慧・

無為法身より顕れたるものなるが故に、広略皆実相（善巧撰化章）と言われるのである」（『全集』15・234頁）

④清浄とは何か

《以下、訳》

『浄土論』にいう。

「この清浄に二種の清浄がある。そのことを知るべきである」

前述の三句の転入という文において、一法句をすべてとって清浄句に収め、清浄句をすべてとって法身に通入すると説いた。いま、そのうちの清浄句について、二種の別あることを示そうとする。それ故に、「知るべきである」といわれたのである。

そこで『浄土論』にこういう。

「二種とは何か。一つには器世間清浄であり、二つには衆生世間清浄である。器世間清浄とは、前述の仏国土の特相の円かなしつらい十七種で、これを器世間清浄と名づける。衆生世間清浄とは、前述の仏の特相の円かなしつらい八種と菩薩の特相の円かなしつらい四種で、これを衆生世間清浄と名づける。このように、一法句に二種の清浄の意義を含めている。このことを知るべきである」

そもそも、衆生は各別の業によって報われた主体（別報）であり、仏国土は衆生の自他ともに受用すべき共通の果報（共報）であって、衆生世間（正報、仏・菩薩）が体、仏国土（依報）がその用で、体用同じではない。それ故に、「知るべし」というのである。しかしながら、浄土のことは、すべて法蔵菩薩の願心によってしつらえられており、願心以外のものは一つもない。衆生世間と器世間とは異ならず同一でもない。同一でないから別報・共報の義が分かれ、異ならないから両者同じく「清浄」というのである。

「器」とは用いるものである。つまり、かの安樂浄土は清浄な衆生（阿弥陀仏や菩薩たち）が受用する仏国土である。それ故に、「器（物）」と名づける。清浄な食物を盛るのに不浄の器を用いると、器が不浄であるから盛られた食物もまた不浄となる。また不浄の食物を盛るのに清浄な器を用いると、盛られた食物が不浄であるから器もまた不浄となる。このように、必ず器と食物が二つともに清らかであるとき、清浄といえるようなものである。それ故に、一つの清浄という名まえのなかに、必ず衆生世間清浄と器世間清浄の二種を収めるのである。

▶「別報」…別々の果報、すなわち仏は仏の行為によって結果を得、菩薩は菩薩の行為によって結果を得て、それぞれ異なった結果を得る。

▶「共報」…共通の果報、すなわち国土は仏も菩薩も同じものを共通して受用していることをいう。

▶「然るに諸法は心もて成ず」…親鸞の加点本は「然るに諸法は心をして無余の境界を成ず」と読む。これは、浄土が願心莊嚴の浄土であるが、実は真如法性・涅槃界に外ならないという意味であろうか。

▶「器」…器世間 (bhajana-loka) の「器」は器物の意味で、衆生を住まわせる国土だからこういう。この語にたいするものが衆生世間 (sattva-loka) である。

⑤もろもろの人天は衆生世間清浄に入れて数えるのか

《以下、訳》

問う。ここで衆生世間清浄というのは、阿弥陀仏とその聖衆である菩薩たちをいう。安楽浄土の神々や人間も、衆生世間清浄のなかに入れて数えるのかどうか。

答える。衆生世間清浄のなかに入れて数えることができるが、まことの清浄ではない。

たとえば、出家者のうちで聖者位の者は、煩惱の賊を殺しているから、比丘と名づけるが、他方、出家して凡夫位にある者も、持戒者・破戒者の別なくみな比丘と呼ぶようなものである。また灌頂かんじょうの王子、すなわち転輪聖王の皇太子は、この世に生まれたとき、三十二の身体的特徴を具え、七宝の所有者となっている。かれはまだ王となっておらず、転輪聖王としての仕事をするのができないけれども、転輪聖王と名づけられているようなものである。なぜかといえば、あとで必ず転輪聖王の位につくからである。かの安楽浄土の神々や人間も、それと同様である。かれらはすべて大乘菩薩道の初地の位の仲間、すなわち正定聚に入って、ついには第八地以上の平等法身の菩薩となる。平等法身の菩薩となるに間違いのないという正定聚の位につくから、神々や人間も衆生世間清浄のなかに入れて数えられるのである。

▶「灌頂」…インドで帝王の即位や立太子にあたって、その頭の頂に四大海の水を灌ぐ儀式。仏教の儀式としても用いられた。ここでは灌頂の儀式をうける王子、すなわち転輪聖王の皇太子をいう。

▶「諸の人天」…「神々や人間」(人天)は六道輪廻の存在者である。安楽浄土にいる聖衆はすべて涅槃界の者たちなのに、神々や人間がいるとすれば矛盾することになる。そこで『無量寿経』には、「其の諸の声聞・菩薩・天・人は、智慧高明にして神通に洞達せり。みな同じく一類にして、形に異状なし。ただ余方に因順す。故に天・人の名あり。顔貌端正にして、世に超えて希有なり。容色微妙にして、天にあらず人にあらず、みな自然・虚無の身・無極の体を受く」とある。その意味は、浄土にいる聖衆はみな同じたぐいで、いろ・かたちに相違がないから、世間でいうごとき区別した呼び名は必要としない。しかしながら、浄土以外の他世界で一般に呼びならわしている言葉に順じて、天とか人とかというのであって、浄土の聖衆はみな浄土の本性たる涅槃のさとりになつた身体をえているという。